パーソナリティ研究
2005　第14巻　第1号　130–131

ショートレポート

© 日本パーソナリティ心理学会 2005

利己主義的目標プライミングが資源分配に及ぼす影響

The Effects of Egoistic Goal Priming on Resource Allocation Task

及　川　昌　典

Masanori OIKAWA

一橋大学大学院社会学研究科
Graduate School of Sociology, Hitotsubashi University

人が持つ目標が動機づけや行動に及ぼす影響には，高い関心が寄せられてきた．従来の研究の多くは意識的統制の重要性を強調しており，目標の自覚と注意投入が効果的な自己制御の重要な要素として扱われてきた (Bargh & Chartrand, 1999)．しかし，近年では，非意識的な過程に着目し目標志向行動を捉えようとする，自動性研究が台頭してきている．

自動動機論 (Bargh, 1990) は，目標の多くは意識的自覚なしに追求されていることを指摘し，人はしばしば明示的な意図を伴わない目標を追求し，意識的自覚なしに目標志向行為に従事していると主張する．一連の目標プライミング研究においては，このような非意識的な目標が，行為者の自覚なしに後続の独立した課題における判断や行動を先導することが示されている (e.g., Bargh, 1990; Bargh & Chartrand, 1999; Bargh, Gollwitzer, Lee-Chai, Barndollar & Trötschel, 2001)．たとえば，「成功」「到達」といった，達成に関連する概念を連想させる刺激をプライミングされた参加者は，それらの概念とリンクしている「達成目標」が自動的に活性化され，統制条件の参加者に比べて，後続課題である単語探索パズルの遂行を高めていた (Bargh et al., 2001)．すなわち，人間の社会行動は，少なくとも部分的には，外部刺激によって非無意識的に方向づけられると考えられる．

しかし，社会行動は，単純な判断から熟慮を要するものまで多種多様であり，全ての社会行動が同じようにプライミングの影響を受けるとは考え難い．では，このような自動動機はどの程度の高次の社会行動まで適用できるのだろうか？　目標プライミングの効果は，反射的反応や単純課題遂行の速度に限定されるのだろうか？　それとも，配分課題といった意識的で熟慮的な判断を要するより高次の反応にまでその影響は及ぶのだろうか？

本研究では，「利己主義目標」の自動的な活性化が，繰り返しのある仮想的な金銭分配課題に及ぼす効果を検討する．このような課題での選択は，継続的に利得を算出し，配分を調整するといった認知活動を要するため，反射的な行動反応では説明されない．この配分課題においては，利己的にも，協調的にも，あるいは平等的にも，振舞うことが可能であり，従来の実験に用いられた単純な作業能率や記憶生成を測る課題に比べて，より日常場面に近い判断の検討が可能である．

また，本研究では，目標プライミングと別に「自己利益を追求する」ように明示的な教示を与える条件を設け，プライミング効果との関係の把握を試みた．通常，自動動機の影響は，曖昧な状況や課題において発現しやすく，しばしば意識的な目標はその発現を阻害する (Bargh & Chartrand, 1999) と考えられている．しかし，明示的な目標が掲げられていても，一旦活性化した動機づけが何らかの影響を及ぼす可能性は十分考えられるだろう．

方　法

実験計画　2（教示：利己主義 vs. なし）× 2（目標プライミング：利己主義的 vs. 中性）の被験者間計画．

実験参加者　大学生 99 名（男性 81 名，女性 16 名，不明 2 名）．配布された冊子によって 4 群に無作為に割り振られた．

手続き　実験は，今後行われる実験の材料を作成するための予備調査課題であるという名目で行われ，各課題が互いに無関連であることが強調された．実験は，まず，単語の記憶課題との名目で，目標プライミング操作から始められた．プライミングあり条件では，全 30 単語中 15 が利己主義目標に関連した単語（e.g., 利益，報酬，収入）であり，統制条件では，30 単語すべてが無関連な中性語（e.g., 道路，温度，砂山）であった．次に，二者択一の金銭分配課題が行われた．分配内容は，Liebrand（1984: Ringmeasure of social values, Figure 1）に基づき，社会交換的価値が近接した 2 点の配当が，毎回ペアとしてランダムな順序で呈示された．教示あり条件では，用紙の題目直後に，「自分の利益の最大化を目指してください」と記されていた．教示なし条件では，二者択一の選択をするように指示した以外には，特に選択方針に関する教示は与えられなかった．参加者は利益や損失を分ける場面を想像して，自分と見知らぬ他者への利得分配に関する選択を 24 回繰り返し行った．この際に，相手の配当を無視して，自分への配当が多い選択が行われた回数を，「自己利益を優先した選択」とした．参加者は各自のペースで課題を行った．全ての参加者は概ね 5 分間で回答を終了していた．最後に，カバーストーリーを満たすためのフィラーである再生課題と Bargh & Chartrand (2000) に基づいた操作の自覚チェックを含む質問が行われた．実

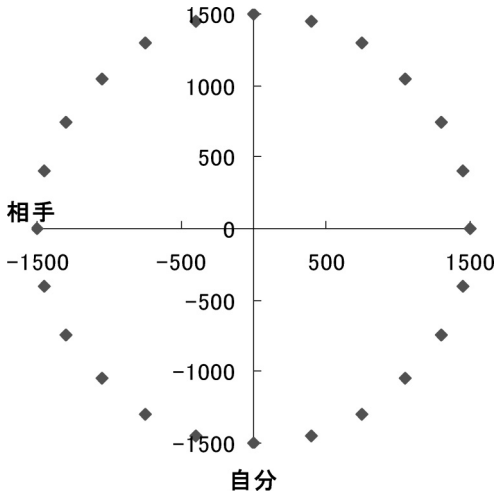

Figure 1　分配表 (Ring measure of social values)
隣接する 2 点の配当をペアで呈示.
参加者は場面を想像し，A か B の二者択一で回答.
例　A 自分： 1500 円プラス　相手： ±0
　　B 自分： 1460 円プラス　相手： 400 円プラス

験操作の自覚を報告した参加者はいなかった.

結　　果

金銭分配課題における「自己利益を優先した選択」の数に対して，2×2（教示×プライミング）の分散分析を行った．各条件の人数および選択数の平均と標準偏差を Table 1 に示す.

分散分析の結果，教示の主効果 ($F(1,95)=10.26$, $p<.001$)，及びプライミングの主効果が有意であった ($F(1,95)=10.87$, $p<.001$)．利己主義的プライミング群では中性プライミング群の参加者に比べて自己利益を優先しており，目標プライミングによる自動動機の効果が見られた．また，この効果は，教示 × プライミングの交互作用による制限を受けていなかった．よって，教示によって明示的な目標が掲げられた条件でも，利己主義的プライミングは消失せず，促進効果は加算的に生じていた.

考察と結論

本研究では，熟慮を要する比較的高次の社会的な課題において，非意識的な目標も意識的な目標と同様に目標志向行動を促進する可能性を検討した．単純な遂行課題への成績や，直感的な判断課題への反応が用いられる従来の研究と異なり，本研究に用いられた課題は，参加者が配分を自由に設定できる課題であり，24 回の選択が繰り返された.

また，利己的教示条件においては，「自分の利益の最大化を目指す」ように，課題の要求が明示されていた．このようなシステマティックな判断が促される状況においても，目標プライミングの効果が消えず，加算的に見られたことは，自動動機の影響が，曖昧状況に限られたものでないことを示唆している．今後は，明確な意図があっても自動動機効果が混入する可能性を念頭に置き，更なる検討が必要だろう.

このように，本研究は，鍵的な環境が，それと連合した動機を我々の自覚なしに活性化させる自動動機効果を示したが，知見の般化には幾つかの限界点も残された．まず，課題が実際の対人相互作用ではなく，想像上のものであったこと，そして，本研究では教示とプライミングの内容が整合方向にある場合のみの検討であった点である．今後は，実際の社会状況において，意図と自動動機が対立方向にある状況において検討することが望まれる.

Table 1　条件ごとの自己利益を優先した選択数

教示	利己主義		統制	
プライム	利己主義	中性	利己主義	中性
N	24	25	25	25
M	17.92	16.20	16.16	13.40
SD	3.71	2.66	3.75	3.29

＊理論的範囲は 0〜24.

引用文献

Bargh, J. A. 1990 Auto-motives: Preconscious determinants of social interaction. In E. T. Higgins, & R. M. Sorrentino (Eds.), *Handbook of motivation and cognition*. 2nd ed. New York: Guilford Press. Pp. 93−130.

Bargh, J. A., & Chartrand, T. L. 1999 The unbearable automaticity of being. *American Psychologist*, **54**, 462−479.

Bargh, J. A., & Chartrand, T. L. 2000 The mind in the middle: A practical fuide to priming and automaticity research. In H. Reis, & C. Judd (Eds.), *Handbook of research methods in social and personality psychology*. New York: Cambridge University Press. Pp. 253−285.

Bargh, J. A., Gollwitzer, P. M., Lee-Chai, A., Barndollar, K., & Trötschel, R. 2001 The automated will: Nonconscious activation and pursuit of behavioral goals. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 1014−1027.

Liebrand, W. B. G. 1984 The effect of social motives, communication and group size on behavior in an N-person multistage, mixed-motive game. *European Journal of Social Psychology*, **14**, 239−246.

— 2004. 11. 26 受稿，2005. 5. 22 受理—